

令和8年度 第1回 自立支援協議会全体会

今回のグループトークを経て見えた、3つのキーワード

① 入口	最初の教育の場から、障がいや地域で暮らすことを知る機会をつくる 相談したいと思ったときに、気軽に相談につなげられる環境をつくる
② 切れ目	今あるネットワークを生かし、制度や分野、ライフステージの変化による「切れ目」をつくらない 一人ひとりに合わせて、支援を「編んでいく」ことを大切にする
③ 当事者の声	本人の思いや経験を、地域づくりや施策に生かす 当事者が参加し、意見を届けられる会議や交流の場をつくる

6地区の話し合いから見えてきたこと

① 内本町	障がい理解・交流	・当事者との交流や体験を通じて、実際の困りごとを知る機会を増やす ・学校教育や地域での体験を通じて、互いの立場を知る ・精神障がいのある人の地域での暮らしや社会参加の姿を発信する ・当事者同士や地域住民が交流できる場を増やす
	計画・地域づくり	・当事者の声を反映し、具体的な取組や数値目標につなげる ・計画を作ること自体を目的にせず、実際の取組につなげる ・障がい分野だけでなく、吹田市全体の課題として考える ・分野を越えた連携を進める
	主なキーワード	当事者との交流・体験 教育・啓発 精神障がいへの理解 当事者の声 計画の実効性 分野横断的な連携
② 豊津・江坂・南吹田	気付きと声かけ	・日常生活の中の「利用しづらさ」や困りごとに気付く ・困っている人に「何かお手伝いできることはありますか？」と声をかける ・地域の中で、困りごとを早い段階でキャッチする
	支援につながりにくい人	・手帳や医療につながっていない人、困りごとを自覚していない人への支援 ・8050問題など、世帯全体の孤立への対応 ・民生委員、医療、高齢分野などとの情報共有・連携
	相談・切れ目のない支援	・障がい者相談支援センターが「何を相談できる場所か」を分かりやすく伝える ・具体的な相談がなくても、気軽に話せる相談環境をつくる ・進学、卒業、18歳、65歳など、ライフステージの変化による切れ目をなくす ・本人だけでなく、家族や世帯も含めて支える
	主なキーワード	気付きと声かけ 支援につながりにくい人 8050問題 相談窓口の周知 世帯支援 切れ目のない支援
③ 片山・岸部	体験による理解	・知識だけでなく、当事者と関わり、一緒に体験する ・「当たり前」を見直し、困りごとや必要な配慮に気付く ・地域行事や自治会など、地域全体に取組を広げる
	相談・アウトリーチ	・必要な人ほど相談窓口につながりにくいという課題 ・状態が悪化する前に、周囲が変化や困りごとに気付く ・本人が困っていると自覚していない場合にも、どう支援につなげるかを考える
	複合課題と多機関連携	・相談、住まい、就労、権利擁護、家族支援など、複数の課題を抱える人への支援 ・制度や分野ごとではなく、本人を中心に支援する ・支援機関同士がつながり、チームで支える
	主なキーワード	体験による理解 アウトリーチ 相談支援 人材不足 住まい 権利擁護 複合課題 多機関連携

令和8年度 第1回 自立支援協議会全体会

④ 千里山・佐井寺	本人理解・意思決定	・本人の考えや感じ方を直接知る ・障がいの有無にかかわらず、互いを知り合う ・住まいを確保するだけでなく、地域で暮らし続けるための支援を考える ・必要な情報や体験の機会を提供しながら、本人の意思決定を支える
	つながり・ライフステージ	・子ども同士のピアサポートや若者のつながりを考える ・SNSなど、多様なつながり方にも着目する ・18歳など、ライフステージの変化による支援の切れ目をなくす ・教育と福祉の連携を深める
	人材・支援の質	・事業所や利用者が増える中で、支援の質を確保・向上する ・人材の育成・確保と、支援者同士が学び合う仕組み ・既存のネットワークを生かし、必要な支援につなぐ
	主なキーワード	本人の意思決定 住まいと地域生活 若者のつながり 教育と福祉の連携 人材確保 支援の質 ネットワーク
⑤ 亥の子谷	相互理解	・一緒に食事をするなど、地域での交流を通じて相手の困りごとに気付く ・依存症など、誤解や自己責任と捉えられやすい課題について正しい理解を広げる ・交流そのものを相互理解の機会にする
	8050・親亡き後・地域移行	・8050・9060問題や、親亡き後の支援を考える ・支援を望んでいない人や、関係機関との接点が少ない人とのつながりづくり ・退院後の地域生活を支える体制を、入院中から整える
	防災・支援者支援	・障がい特性に応じた災害時の配慮を地域に広げる ・医療機器を必要とする人や難病患者への災害時支援を考える ・支援者の人材不足や高齢化への対応 ・支援者自身を支える仕組みを整え、地域の支援力を高める
	主なキーワード	相互理解 8050・9060問題 親亡き後 地域移行 防災 人材不足 支援者支援

今回出された意見は、障がい施策推進専門分科会にも共有し、今後の施策や地域づくりの検討につなげていきます。

①内本町グループトーク

障がい理解・交流	障がいのある人への理解を深めるためには、当事者との交流や体験を通じて、実際の困りごとを知る機会を増やすことが大切だという意見が多く出された。特に、学校教育や地域での体験を通じて、障がいのある人や支援する人の立場を知ることの重要性が共有された。
精神障がいへの理解	精神障がいへの偏見をなくすため、地域で暮らしている人の姿や社会参加の事例を積極的に発信すること、当事者同士や地域住民との交流の場を増やすことが必要との意見があった。
計画・地域づくり	障がい者施策については、計画を作ること自体を目的とせず、当事者の声を反映し、具体的な取組や数値目標につなげることが重要であるとの意見が出された。また、障がい分野だけでなく、吹田市全体として課題を考える視点や、分野を越えた連携の必要性も共有された。
主なキーワード	当事者との交流・体験／教育・啓発／精神障がいへの理解／当事者の声／計画の実効性／分野横断的な連携

【障がい者差別解消支援専門部会】

- 1 ・障がい者差別をなくす、軽減するには障がい当事者と健常者との交流や体験、経験が必要である。
- 2 ・小学校等の教育機関でも当事者からの話を聞いたり、アイマスクをしながら杖で移動したり、車いす体験(乗る側・押す側)をすることで障がい者や介護者の立場になる経験をすることで「障がい」を知覚できるようになる。
- 3 ・現在では聴覚障がいの方に対しても話ができなくとも読み上げアプリ等がありコミュニケーションが比較的に円滑になってきている。アプリのためもう一度聞きなおすこともできて便利である。
- 4 ・市民が差別を理解する場がない。伝える場所も少なく、その少ない場に来る人もそもそも障がいに多少興味がある人物だけである。もっと大々的に差別解消、障がいを理解する場を作る必要がある。

【精神障がい者にも対応した地域包括ケアシステム専門部会】

- 5 ・精神障がい者に対する地域移行支援の支援員の人材不足があるため、支援員の育成が必要。
- 6 ・精神障がい者と聞くと大きな犯罪(殺人、包丁を持って暴れる等)のイメージがある。そのイメージを払拭するために精神障がい者の成功例等をテレビ、SNS等メディアに拡散してほしい。精神障がい者のニュースとあると否定的な報道がされることが多いと感じられる。現に統合失調症等で暴れる精神障がい者もいることは間違いないが、社会復帰や成功体験をしている人がいるため、そこにフォーカスをあててほしい。
- 7 ・精神障がい者の方との交流の会を作れば相互理解ができるのではないかと考えている。そのため交流の場をもっと増やしたい。
- 8 ・精神障がい者の方の成功体験をドラマ化等してもっと広げてほしい。

【当事者会】

- 9 ・当事者会作成のハンドブックは素晴らしいものだと考えているが、それをどこでどのような人々に配布するかが重要であると考えている。ハンドブックの存在の周知、配布方法について何かよい方法はないか。
- 10 ・当事者達の集まりをもっと増やしていければ同じ苦しみ、障がいの対処方法等の意見交換をすることができると思う。そのため、障がい当事者の方の集まりを増やしていくことが必要である。この集まりとは堅苦しいものではなく、サークル・茶話会程度の温度感でできるものがよいと考えている。
- 11 ・障がいに縁のない方についても当事者と関わりができるイベントがあれば相互理解につながると思う。

【障がい者施策推進専門分科会作業部会】

- 12 ・計画が一つにまとめられるのはありがたい。2つあると何が何だかわからない。
- 13 ・吹田市障がい者計画も、障がい者支援プランも誰が知っているのか。会議録が共有されていないなど、形式的になっていると感じている。本来は実態に即して当事者の声を集めて作成すべき。節目の中でできる計画、できない計画とあると思うが、できないことも含めて知っておくべき。
- 14 ・当事者の意見に耳を傾けて吸い上げようとしているのはよい。計画を作成すること自体が目的ではない。実際にどのように動いていくのか、数値をどのように実行していくのが大事。数値目標を大切に作成してほしい。
- 15 ・課題が10個に整理されていることは非常にわかりやすい。親なき後、人材面、いずれも障がいに限った話ではない。障がいのみならず、吹田市全体でどう考えていくか、という視点が職員にも必要である。縦割りはよくない。
- 16 ・吹田市の強み、弱みをもっとオープンにしてもよいのでは。吹田市で生まれ、育ち、働き、そのうえでの良し悪しがきつとある。また、表に出てこれない当事者の声をどう吸い上げるか。吹田市で広域的に考える課題。それらをまとめあげて作成してほしい。
- 17 ・企業とのかかわりについて、吹田市内での接点は少ない。市外との連携も必須になっている。
- 21 ・職場に戻り、今日の話共有したい。
- 22 ・地域会議でも話を広げていきたい。

②豊津・江坂・南吹田グループトーク

気付きと声かけ	日常生活の中には、障がいのある人にとって利用しづらさや困りごとが生じる場面があり、まずは周囲がそのことに気付き、声をかけることが大切だという意見が出された。
支援につながりにくい人	精神障がいのある人については、手帳や医療につながっていない人、困りごとを自覚していない人など、支援につながりにくい人が地域にいることが課題として挙げられた。8050問題や世帯の孤立についても、民生委員や医療・高齢分野などとの情報共有や連携を深める必要があるとの意見があった。
相談・切れ目のない支援	障がい者相談支援センターについて、何を相談できる場所なのかが十分知られておらず、相談のハードルを下げるための周知や環境づくりが必要との意見が出された。また、年齢や進学、卒業、65歳到達など、ライフステージの移行時に支援の「切れ目」が生じることが課題として挙げられ、本人や家族を含めた切れ目のない支援の必要性が共有された。
主なキーワード	気付きと声かけ／支援につながりにくい人／8050問題／相談窓口の周知／世帯支援／切れ目のない支援

【障がい者差別解消支援専門部会】

- 1 ・壁を乗り越えた共生社会の実現というが、実際に壁は乗り越えられるのか。
- 2 ・障がいのない人が普通にしていることを、障がいのある人が行うことが難しい場面があり、そこに気がつけるのか。
- 3 ・食事の場で「自由にお取りください」というのは、障がいがなくとも不自由に感じることがある。
- 4 ・支援学校の生徒について、学校では一人一人にあった支援を提供できるが、卒業後も本人が困らないような教育が必要。
- 5 ・様々な障がい種別があり、相手が何に困っているか知り、その上で自分にできる支援を行うことが必要。
- 6 ・以前受けた研修で、困っているかもしれない人がいたときに「大丈夫ですか？」ではなく、「何かお手伝いできることはありますか？」と声をかけたほうが良いと学んだ。話しかける勇気をもって、まずは声をかけることから始めたい。

【精神障がい者にも対応した地域包括ケアシステム専門部会】

- 7 ・精神疾患があると思われるが、手帳を持っていない人や治療を受けていない人もいる。
- 8 ・8050問題は最近クローズアップされているが、まだ地域に埋もれている人もいる。
- 9 ・障がい者相談支援センターでは、自立支援医療の相談が一番多いように感じる。精神保健福祉手帳はないが、自立支援医療のみを受けている人もかなりの数いる印象。申請の手続きのみを行い、相談があるか聞いても「ない」と答える人がほとんど。
- 10 ・困っている自覚がない場合もある。
- 11 ・8050問題では、高齢の親が地域包括支援センターに相談する。
- 12 ・本人を内科等の病院に連れていくことで、初めて世帯の状況がわかることもある。
- 13 ・精神疾患がある人も精神科への通院や精神障がい者に偏見がある場合もある。精神疾患があることを知られたくなく、遠くの病院に通っている人もいる。
・当事者達の集まりをもっと増やしていければ同じ苦しみ、障がいの対処方法等の意見交換をすることができると思う。そのため、障がい当事者の
- 14 方の集まりを増やしていくことが必要である。この集まりとは堅苦しいものではなく、サークル・茶話会程度の温度感でできるものがよいと考えている。
- 15 ・自治会等がなくなり、世帯の孤立が進んでいる。民生委員が把握していても、個人情報の観点から共有してもらうことが難しい。ケアマネジャーや民生委員ととも情報共有できれば、地域のネットワークが広がり課題を持つ世帯の発見にもつながる。
- 16 ・支援学校の通学者の世帯でも、世帯全体を把握できていないことは多い。

【当事者会】

- 17 ・どこに相談したら良いかわからない、という課題はたしかにある。
→ワンストップ窓口や障がい者相談支援センターがあげられる。
- 18 ・障がい者相談支援センターができてから6年ほど経つが、まだ地域に浸透していないと感じる。啓発活動が必要。
- 22 ・支援学校の先生は、昔より就職先や卒業後の進路として選択できる先が増えていると感じている。企業側から学校とのつながりを求めてくることもある。
- 23 ・保護者間のネットワークがあり、困りごとを相談すればその中で解決していることも多い。生の情報が知れるので、強いつながりだと感じている。

【障がい者施策推進専門分科会作業部会】

- 24 ・パブリックコメントを聞くのみで計画を策定する自治体も多い中で、作業部会として当事者の意見を伝える場を設け、施策に反映しているのは好印象。
- 25 ・地域福祉計画の策定を担当しているが、障がいの方でも読めるような計画を求められることがあった。その意見を踏まえてイラストを多めに入れたり、読みやすくする工夫をしている。誰のために計画を策定しているか、考えて策定している。
- 26 ・作る側も読みやすいような工夫をしているが、それが読み手に伝わっていないこともある。計画の策定となると、どうしても抽象的な表現が多くなる。その場合、どのような工夫が必要か。
→全体に向けた冊子の作成で、全員にわかるように作成することは難しい。その分、説明するときに紙に書いて説明する等の工夫をしている。
- 27 ・コラムをたくさん入れ、読み手が興味をもてる、わかりやすくなる工夫をしている。
- 28 ・地域としての課題を見つけることも難しい。何が課題になるのかわからない。
・切れ目のない支援について、年齢ごとのハードルや他機関への引継ぎが必要など、実際には切れ目が存在している。たとえば、支援学校の生徒が
- 29 高校進学するときに、定員割れしている公立高校を受験して合格したは良いが、その後卒業できないケースがみられる。18歳で児童から成人扱いになること、65歳で障がい福祉サービスから介護保険サービスに移行が必要になること等もあげられる。
- 30 ・「切れ目のない支援」「地域づくり」と言葉では簡単に言えるが、実際に行うことは難しい。

【地域に戻ってどう生かすか】

- 31 ・支援学校の先生は、現場の先生たちと共有する。
- 32 ・相談の入り口の部分で、相談してもらいやすい環境づくりを行う。
- 33 ・地域の人とさらにかかわりを深め、地域の声を拾い上げたい。これまで相談に来れなかった人も相談できる環境を作りたい。
- 34 ・家族や家庭にも支援の輪を広げ、家庭ごと支援していきたい。

③片山・岸部グループトーク

体験による理解	障がいへの理解を深めるためには、知識を学ぶだけでなく、実際に当事者と関わったり、体験したりすることが重要との意見が多く出された。また、地域行事や自治会活動などを通じて、地域全体へ取組を広げる必要性も挙げられた。
相談・アウトリーチ	精神障がいのある人の相談では、必要な人ほど窓口につながりにくく、状態が悪化してから相談につながるケースが多いことが課題として共有された。本人が困りごとを自覚していない場合や、自ら発信できない場合に、地域や周囲がどのように気付き、支援につなげるかが重要なテーマとなった。
複合課題と多機関連携	相談支援、人材不足、住まい、就労、権利擁護、家族支援など、多くの課題が相互に関連していることが共有された。一人の人が複数の課題を抱えるケースもあり、制度や分野ごとではなく、本人を中心に関係機関が連携して支援する体制の必要性が強く挙げられた。
主なキーワード	体験による理解／アウトリーチ／相談支援／人材不足／住まい／権利擁護／複合課題／多機関連携

【障がい者差別解消支援専門部会】

- 1 ・「食事」をテーマにすることで、他の課題にも触れながらいろいろな話が出てくるんだなあと思った
- 2 ・会話に入れない、そういったことで次は行きたくなくなった、という話が印象的だった
- 3 ・「体験」することがすごく大事なことだと思った。例えば、筆談で話ができなければ、次はどうするか？手話を習ってみようか、と次のことも考えられるようになる。
- 4 ・最近電車の遅延があった際、職員が少ない・いない駅だと、質問や対応はインターホンで行うことになるが、耳の聞こえない人はどうやってコミュニケーションを取るのだろうか、と思ったことがあった
- 5 ・部会の取り組みは良いと思ったが、部会だけで終わらず、どのようにして地域を巻き込むことができるか、が課題だと感じた。自治会と協力して周知とか。地域で行われているお祭りや運動会に参加できない人、行きにくい理由は何か、といったことを考えてみても良いかもしれない。
- 6 ・「ご自由にが不自由に感じる」という話が印象的。オープンにしているようで、自由に動けなくなってしまう
- 7 ・課題を汎化していく仕組みが必要

【精神障がい者にも対応した地域包括ケアシステム専門部会】

- 8 ・相談支援センターでは、精神障がいに関する相談が多いとの意見があった。
- 9 ・必要な人がなかなか窓口にたどり着くことができない状況がある
- 10 ・悪化してから相談につながるケースが多い
- 11 ・自分が困っている状況だと認識できていない人も多い
- 12 ・自分から発信できない人に、周りがどのように気付いていくか
・当事者達の集まりをもっと増やしていければ同じ苦しみ、障がいの対処方法等の意見交換をすることができると思う。そのため、障がい当事者の
- 13 方の集まりを増やしていくことが必要である。この集まりとは堅苦しいものではなく、サークル・茶話会程度の温度感でできるものがよいと考えている。
- 14 ・困りごとをキャッチできる方法はあるのだろうか
- 15 ・困る一歩手前の段階で、周りからの一声でもあれば違うのかもしれない。でも、本人に自覚がない、困っていると思っていない、という人にどうアプローチできるだろうか
- 16 ・高齢の地域包括支援センターはだいぶ周知が進んできたと思うが、障がいの相談支援センターの存在はまだまだ遅れていると思う
- 17 ・本人が気になる部分があれば、「小さいことでも相談できる」と促し、相談歴を作っていくことも大事なことだと思う
- 18 ・昨今の「横のつながりが薄れてきている」問題はあるが、地域の人から連絡を受けるケースもたくさんあり、人伝に現状を聞いているケースもある
- 19 ・相談者は「他人の私が言っても良いのかな」と言いながら来る人もいるので、別に誰でも大丈夫なんだよ、と伝えて話してもらうようにしている。
匿名希望の人も多いので、守秘義務、個人情報についてはしっかりと説明するよう心掛けている
- 20 ・精神障がいの課題は医療との連携が不可欠
- 24 ・支援に必要な情報が関係機関の間で適切に共有されれば、本人が新しい相談先で経過を一から説明する負担を軽減できるのではないか、との意見があった。
- 25 ・市職員もそれぞれがすべての制度を熟知しているわけではないので、案内だけになってしまうことも多い。対応がワンストップになれば良いと思う
- 26 ・自分が子どもの頃は「教わる」というよりも、同級生や支援学級との交流により自動的に「体験」していたと思う。特に教育現場では分離教育よりもインクルーシブの推進の方が望ましいと思う
- 27 ・勉強ではなく、「共に体験する」ことが大事
- 28 ・支援者が増えること、輪が広がっていくことが大事
- 29 ・防災ハンドブックは危機管理室の資料等に入れ込むことはできないだろうか
- 30 ・出前講座もいろんなメニューの中から選べるようになれば利用しやすい
- 31 ・社協のボランティア参加等にもハードルを低くして参加してもらえるようになれば、参加しやすいかもしれない

【障がい者施策推進専門分科会作業部会】

- 32 ・人材不足は深刻な問題。できる人が不足している、セルフプランにならざるを得ない、必要なアセスメント・サービスが受けられない。何か所にも電話しているがどこもいっぱいと断られてしまう
- 33 ・就労の相談は2日に1回は入っている感覚。一般就労が難しい人はA型・B型を案内。一人では見つけられない人が多いので、支援が必要。
- 34 ・地域の受け入れが難しいと感じている。大家から「出ていってほしい」と言われて困っているケースの相談を受けたことがある
- 35 ・目に見えない障がい者への理解促進が必要
- 36 ・こども発達支援センターでも重いケース以外はセルフプランになってしまう状況にある
- 37 ・放課後等デイサービスが増える中で、それぞれの事業所の特色を生かしながら、支援の質をどのように確保・向上していくかが課題との意見があった。
- 38 ・家族支援についても、まずは寄り添い、交流できる場への参加を提案している。吹田市は肢体・知的で「わかたけ」があるが、もっと範囲を広げていく必要性があると思っている。
- 39 ・障がいのある人が地域で安心して暮らすためには、本人への支援だけでなく、家族や地域、住まいの提供者などを含め、困りごとやトラブルを相談できる仕組みも必要との意見があった。
- 40 ・保護者や大家、地域だけが責任を受け止めるのは限界がある
- 41 ・障がいのある人の住まいの確保については、合理的配慮の推進とあわせて、貸主側の不安や負担にも目を向け、地域全体で支える仕組みが必要との意見があった。
- 42 ・権利擁護の部分は社協で委託を受けているが、開始してから相談が増加傾向にあり、小さなものから重たいものまで相談は非常に多い
- 43 ・障がいだけではなく、高齢の問題も複合的に関わっている
- 44 ・権利擁護の部分はもっと拡充していくべきだと考える
- 45 ・地域からの相談やトラブルについては、気軽に相談に行くことができるよう啓発にも力を入れている
- 46 ・その人の見えない部分についての相談の積み重ねが大事である
- 47 ・障がい明確定でない場合や、医療・福祉につながっていない人への支援についても課題があるとの意見があった。
- 48 ・親も子の障がいを認めたくない気持ちがあり、適切な医療・福祉・教育にタイミングよく繋げていくことが重要
- 49 ・それぞれで当事者意識を持っていくこと
共有
- 50 ・ひきこもり、未就労、ゴミ屋敷 一人の人の話でもたくさんの問題を抱えていることがあり、一つ一つ対応し、支援していつている
- 51 ・相談体制の充実を進めていく
発達支援を必要とする子どもが増える中、保育現場における受入れや支援体制についても課題がある。
不適切な保育にならないよう巡回を進めているが、職員の疲弊も強く、どのようにアウトリーチ支援を継続していくことができるか検討中
- 55 ・民生委員や自治会と話す際に、様々な相談先があることを伝えていくことで、地域にも派生させていきたい
- 56 ・まずは知ることが大事なので、民生委員、地区福祉委員への周知を進めていきたい
また、公民館等で当事者の話を聞く機会を作れたら、と思うが、バリアフリー化されていない公民館も多いので、実施していくことから課題を解決していかなければならないと思う

④千里山・佐井寺地域グループトーク

本人理解・意思決定	当事者の考えや感じ方を直接知ること、障がいの有無にかかわらず互いを知り合うことが、共生社会につながるという意見が出された。精神障がいのある人の地域生活については、住まいの確保だけでなく、その後の生活をどのように支えるか、本人の意思決定をどう支援するかといった課題が挙げられた。
つながり・ライフステージ	子どものピアサポートや若者の孤立について意見交換が行われ、SNSなど従来とは異なるつながり方にも着目する必要があるという意見があった。また、18歳などライフステージの変化に伴う支援の切れ目や、教育と福祉の連携が課題として挙げられた。
人材・支援の質	事業所や利用者が増える中で、支援の質をどのように確保するか、人材をどのように育成・確保するかについても議論された。地域の相談支援では、ワンストップを意識しながら必要に応じて関係機関につなぐこと、既存のネットワークを活用して支援を継続することの重要性が共有された。
主なキーワード	本人の意思決定／住まいと地域生活／若者のつながり／教育と福祉の連携／人材確保／支援の質／ネットワーク

【障がい者差別解消支援専門部会】

- 1 ・当事者の考えを聞かないと分からない。
- 2 ・障がい者だからではなくとも嫌だと思うことはある。飲食店の回転テーブルで気をつかってしまうのは共通している部分ではないか
- 3 ・共生社会「支える、支えられるの枠を超える」について改めて思い知らされた。
- 4 ・地域会議で知的障がい者の立場になる体験をした。インドネシア語で話しかけられる体験
- 5 ・知的障がい者もそれぞれ個性があり、やはり互いに知り合うことが大切である。

【精神障がい者にも対応した地域包括ケアシステム専門部会】

- 6 ・そもそもにも包括とは？
- 7 ・相談先がわからない…当事者の方に情報が届かない。そもそも住む場所がない、グループホームでも他の人がいると落ち着かない。
- 8 ・住む場所を見つける困難さと住んだ後の困難さは異なる
- 9 ・退院後の生活場所は斡旋業者をかかえているところもあれば家族に任せるところもある
- 10 ・ワンルームタイプのグループホームを好む人が多くなってきている
- 11 ・本人の意思決定を大切にする一方、社会経験が少ない場合には、必要な情報や体験の機会を提供しながら意思決定を支えることが重要との意見があった。
- 12 ・長期入院等により地域生活の経験が少ない場合には、本人が地域での生活を具体的にイメージし、選択できるよう支援する必要があるとの意見があった。
- 13 ・当事者達の集まりをもっと増やしていければ同じ苦しみ、障がいの対処方法等の意見交換をすることができると思う。そのため、障がい当事者の方の集まりを増やしていくことが必要である。この集まりとは堅苦しいものではなく、サークル・茶話会程度の温度感でできるものがよいと考えている。
- 14 ・子ども同士のピアサポートは、放課後等デイサービスや学校などで自然に生まれることもある。一方、活動として位置付ける場合には、年齢や本人の認識等に配慮が必要との意見があった。

【当事者会】

- 15 ・本当に若者の障がい者は孤立しているのか？SNSが普及しこれまでとつながり方が多様になっている可能性がある。ただつながっていると感じているだけかもしれない。
- 16 ・若者は対人不安が大きい
- 17 ・出前講座の場所で良い案はないか 学童はどうか。夏休みで過ごす時間が長く、外では気温が高く遊べないためちょうどよい催しになるかもしれない。
- 18 ・種別も様々であるがそもそも障がいがあるのかないのかわからないパターンもある。
- 19 ・LINEのオープンチャットで同じ悩みを抱える人が集まり、イベントの周知などが行われている。
- 21 ・療育、生活支援を密にしていくことが大事だと思っている
- 22 ・保育所等訪問支援は9人から75人になった。事業所が増えており、市外の人も利用できるため届いていなかったところにも届くようになった。ただやはり不十分なところもある
- 23 ・成長した後に次のステージに行った時のつながりはあるのか
- 24 ・18歳の切れ目→児から者に移っていくときの難しさはある
- 25 ・つながりの確認方法として、事業所と本人のつながりがきれてしまうと学校に確認している
- 26 ・教育と福祉のつながりの重要性
- 27 ・高校の選択肢が増えている。卒業後の進路も増えており様々である
- 28 ・情報を継続的に、成長に伴って本人の意思決定をサポート
- 29 ・8050、9060問題 地域包括との連携がより重要になる
- 30 ・入り口が大切、つながっていない人にどうつなげていくか

人材確保について

- 31 ・資格のしほりがある、有資格者
- 32 ・利用者数は増加している、施設も増加中 94事業所
- 33 ・質の担保 職員同士が学んでいく
- 34 ・事業所連絡会や市の研修などを活用し、事業所同士がつながりながら支援の質を高める取組が行われている。
- 35 ・職員同士も相談し、話し合いたいニーズがある
- 36 ・事業所連絡会で悩みの共有や相談ができることは良い 横のつながりを増やして質の底上げしていきたい
- 37 ・子どもの支援では、夏休みなど生活リズムが変わる時期に、支援する側も対応を工夫する必要があるとの意見があった。

■最終

- 38 ・高齢、障がい、当事者、家族、関係機関のネットワークを大切にしたい。
- 39 ・事業所に本日の内容をもちかえり、今後も今あるネットワークを活用していきたい。
- 40 ・ワンストップの相談支援を心掛けている。相談先がわからないという生の声も実際ある。障がい者相談支援センターで受けた相談で、回答できるところは答えて、必要に応じて関係機関へつないでいくようにしている。

⑤亥の子谷グループトーク

相互理解	障がいのある人との食事や地域での交流を通じて、普段意識していなかった困りごとや配慮に気付くことができるとの意見が出された。また、依存症など、本人の甘えや自己責任と捉えられやすい課題についても、正しい理解を広げる必要があるとの意見があった。
8050・親亡き後・地域移行	精神障がいのある人やその家族については、8050・9060問題や親亡き後の支援が大きなテーマとなった。本人が支援を望んでいない場合や、関係機関との接点が少ない場合に、どのように支援につなげるかが課題として挙げられた。また、退院後の地域生活を支える体制を入院中から整えていく必要性も共有された。
防災・支援者支援	防災については、障がい特性に応じた配慮の周知や、医療機器を必要とする人、難病患者への災害時支援などが議論された。施策面では、支援に携わる人材の不足が課題として挙げられ、支援者自身を支える仕組みを整えることが、地域の支援力や人材確保につながるとの意見が出された。
主なキーワード	相互理解／8050・9060問題／親亡き後／地域移行／防災／人材不足／支援者支援

【障がい者差別解消支援専門部会】

- 1 ・障がい者と一緒に食事することはこれまであったが、場所の配慮はしてもメニューまで意識が回らなかった。
- 2 ・様々な壁があると感じた。
- 3 ・依存症(アルコール、ギャンブル、ゲーム)も病気なのに理解が進んでおらず、本人の甘えや自己責任として捉えられてしまう。もっと知識を啓発する必要がある。
- 4 ・差別解消支援専門部会で同じ席にいた障がい者の人は前向きな思考で、飲み会にも積極的に参加したいと話していた。
- 5 ・チェーン店だと店の構造がどこも似ているため、障がい者にとって行きやすいと感じた。
- 6 ・食事が相互理解を深める場所になればいいと思う。

【精神障がい者にも対応した地域包括ケアシステム専門部会】

- 7 ・家族会のメンバーは70～90代。子は50～60代であり、8050問題や9060問題が顕著。
- 8 ・子が複数の関係機関につながっていれば、親亡き後も支援が円滑に進む。関係機関につながっていなかったり、一つ、二つしかない場合だと諸手続さを行う人がおらず、支援が難航する。
- 9 ・高齢の親と障がいのある子の2人世帯があり、近隣住民から心配情報が入り自宅を訪問するが、子が自宅から出てこず接点がない。
- 10 ・支援を望んでいない人と接点を持つことが困難。
- 11 ・退院後の地域生活を支えるため、入院中から関係機関が連携して支援体制を整えることが重要である。一方、十分な体制を整えることが難しいまま退院となる場合もあるとの意見があった。
- 12 ・長期入院者の中には地域生活のイメージが持てず、「病院がいい」と訴える人がいる。
- 13 ・当事者達の集まりをもっと増やしていければ同じ苦しみ、障がいの対処方法等の意見交換をすることができると思う。そのため、障がい当事者の集まりを増やしていくことが必要である。この集まりとは堅苦しいものではなく、サークル・茶話会程度の温度感でできるものがよいと考えている。

まとめ

⇒退院後の生活を支えるための、地域の体制整備が重要。

⇒親亡き後、子を地域で支える体制整備が重要。

【当事者会】

- 14 ・防災ハンドブックは民生委員にも配布されており、とても分かりやすかった。
- 15 ・「この障がいがある人はこの支援が必要」等の内容が記載されており、配慮が必要な事項がよくわかった。
- 16 ・もっとハンドブックを普及・啓発できればいいと思う。
⇒防災ハンドブック作成の助成金や補助金等を計画に盛り込んでどうか。

【障がい者施策推進専門分科会作業部会】

- 20 ・複数の会議に参加させてもらっている。知識がないため、いろんな話を聞くだけでもすごく勉強になる。
- 21 ・計画に分野分けを細かくしてくれたため、これからの将来像が見えてきた気がする。
- 22 ・現任者研修受講時に毎回、現場の課題を自立支援協議会に上げることが重要と口を酸っぱくして言われる。
- 23 ・課題が多すぎて何を上げればよいのか悩むことがある。
- 24 ・ALSの患者を担当できるケアマネジャーがいないため、保健所では知識の啓発のために研修会を開くことがある。
- 25 ・地域保健課の精神保健グループでも、支援者が支援困難なケースの対応に苦慮している場合は一緒に訪問するなど支援者の支援に取り組んでいる。
まとめ
⇒住みやすい地域づくりを進めることが、人材確保に直結すると思う。
⇒支援者を支える体制を整えなければ、人材不足の解消にはつながらない。

感想

- 26 ・会議のやり方がとても印象的だった。以前参加したときは報告を聞くだけだったが、わいわい意見を言える雰囲気を作られていてすごくよかったと思う。
- 27 ・活発に意見交換ができてとても楽しかった。ほかの会議もこんな場ならよいのに。

⑥千里ニュータウングループトーク

日常生活の困りごと	飲食店でのメニューやタブレット注文、エレベーター利用など、日常生活の身近な場面から、障がいのある人が感じる困難について意見が出された。実際に一緒に体験し、話をすることで、「当たり前」を見直すことの大切さが共有された。
チーム支援・支援者支援	相談支援については、一人の担当者に相談が集中することや、支援者自身が孤立してしまうことが課題として挙げられた。本人を複数の支援者で支えるチームづくりや、日頃から支援者同士がつながっておくことが重要との意見があった。
ワンストップ・当事者参画	行政や支援機関の窓口が分かれていることで、複合的な課題を抱える人が支援につながりにくい場合があることから、ワンストップ型の相談支援や、分野を越えた連携の必要性が挙げられた。障がい者施策の計画については、当事者の声をより反映すること、作成して終わりではなく、地域で実践・検証しながら改善していくことが重要との意見が共有された。
主なキーワード	日常生活の困りごと／「当たり前」の見直し／チーム支援／支援者の孤立防止／ワンストップ相談／当事者参画／計画の検証

- 1 飲食店のメニューの読み上げが大変、相手の好みもわからない状態だと読む部分を絞れない。
- 2 タブレットでの注文も難しい、読み上げ機能があれば楽になるかもしれない。
- 3 実際に飲食店でバイトしているが、目の見えない人が来店されても対応が分からない、教育もされていない。
- 4 一緒に体験、話し合うことで得られる気付きがあらためて大切だと感じる。
- 5 差別解消の視点からも当たり前を見直すことが大事、自分事として捉えられる機会があれば。
- 6 車いすだと階の途中では譲ってもらえないと絶対にエレベーターに乗れない。
- 7 見た目で分からない障がいがある、地域で暮らしていく中でどう周囲に伝えていけばいいか。
- 8 何かあった時は複数の支援者で対応できる体制づくりを、一人ですることはなかなか大変。
- 9 日ごろから支援者同士でやり取りをしておく、支援者も孤立しないよう繋がる。
- 10 ケースワーカーなど特定の担当者に相談が集中すると、支援者の負担が大きくなるため、複数の支援者で対応できる体制づくりが必要との意見があった。
- 11 行政の窓口が分野ごとに分かれていることにより、複合的な課題への対応が難しい場合がある。分野を越えた連携や、相談者にとって分かりやすい支援体制を検討する必要があるとの意見があった。
- 12 支援窓口のワンストップ化であれば八尾市のように実現できるかもしれない。
- 13 本人に、自分にはこれだけの支援者がいると実感してもらえるような体制や、すぐ支援者を繋げられるようなチームでの支援が理想。
- 14 当事者会と当事者が繋がれる機会がほしい。
- 15 自分の行っている分野に関しては知識を重ねられていると思うが、他のことがさっぱりわからない。
当事者達の集まりをもっと増やしていければ同じ苦しみ、障がいの対処方法等の意見交換をすることができると思う。そのため、障がい当事者の
- 16 方の集まりを増やしていくことが必要である。この集まりとは堅苦しいものではなく、サークル・茶話会程度の温度感でできるものがよいと考えている。
- 17 複合的な課題を抱えているとわかっていても、支援する側が異なるので口を出しづらい。
- 18 複合的な課題について、制度や支援機関の役割分担により調整に時間を要する場合があるため、分野を越えて連携することが重要との意見があった。
- 19 計画の作成には当事者の声が必要不可欠だが、足りているのかは疑問。より当事者に理解しやすい内容で意見をもらいやすくなる必要性がある。
- 20 初めて計画だけを見てもわかりづらいが、説明をもらえるとひとつひとつの必要性が感じられる。
- 21 計画作成がゴール、目的なのではなく、それを地域で検証していく必要がある。ブラッシュアップしていくことが大事。
- 22 課題を全員で共有することで声を届けやすくなる。計画だけでは本当に実現できるのか、どう実現していくのかが不明瞭。
- 23 若い世代は小学校の頃から福祉について触れる教育の機会があり、気づきがあれば力になってくれることが多いと感じる。

発表者(檀上)

【障がい者差別解消支援専門部会】

- 1 部会では食事会を取り上げたが、食事会だけでなく生活に対する理解不足があり、理解に向けた啓発が大切
- 2 どこに困っているかわからない。気づけない。食事会の取り組み事例集を作って市民に配られたらいいな。
- 3 一つ一つ、生活の場面における課題を出し合っていくことが大切。
食事会を例にして、何に困っているかがわかったのはよかった。手話言語等促進条例に、小中学校で手話等を勉強する機会についても書かれて
- 4 いるが、教育委員会には浸透していない。共生社会のために長期的な取り組みと喫緊の取り組み、2面で考えることが大切。福祉と教育の連携も必要。

【精神障がい者にも対応した地域包括ケアシステム専門部会】

- 6 発達障がいだが、療育手帳が取れず、精神保健福祉手帳しか取得できない人がいる。受けられる支援が少なくなる。精神障がいの軽度の方への支援が必要。
- 7 ピアサポーターが大切。中途障がいだが、仲間がいることで明るくなった。どこに相談したらいいか、事例を知れる場があれば。支援の成功例を共有してもらえれば良いのではないかな。
- 8 病気をした時はどうなるかと思ったが、今は支える存在になれた。今回初めて部会に当事者が入れた。施策につなげていけるのでは。
- 9 精神障がい者については、やっと追いついてきたが、まだまだ理解されにくい存在。ピアサポートによって仲間で支え合う仕組み。もっと多くの関係者も入っていければ。
初めて現実を知ることができた。子供支援で言うと、子供同士のピアサポートが必要ではないか、特に不登校支援など。
- 10 運営加算のためではなく、気持ちを分かり合うためのピアサポートの取り組みが必要。計画の数値としてのためだけではなく、行政も困っている人を支える窓口としての取り組みをしてもらえれば。

【当事者会】

ピアサポート以外にも何に困っているのかを知れた。ピアサポートの重要性を再確認できた。

- 12 当事者達の集まりをもっと増やしていければ同じ苦しみ、障がいの対処方法等について意見交換をすることができると思う。そのため、障がい当事者の方の集まりを増やしていくことが必要である。この集まりとは堅苦しいものではなく、サークル・茶話会程度の温度感でできるものがよいと考えている。
小さい時は心のバリアフリー、合理的配慮を学ぶことが必要になるが、成長するにつれてどう支援するかのかの考え方も必要になる。出前講座は前年度はできたが、今年度はできなかった。社会福祉協議会との連携が必要。
当事者が出前講座に出向くのは意義がある。学校によって取り組みに差がある。
目に見えない障がいはピアサポートは難しい。知的障がいの場合、誰がするのか。学校内の知的障がいの子供への配慮もある。出前講座は進めていけたら。
- 16 防災ハンドブックは作業所等を通して周知していきたい。ただ公募委員が今年度で任期が終わってしまうという課題。熊本地震もあったところだ。
防災だけでも抜き出して取り上げるべき課題。当事者会の努力だけではなくどう取り組んでいくか。

【障がい者施策推進専門分科会作業部会】

聴覚障がいがあり、センター校に通っているが、通学支援がなくて保護者が送り迎えするのが当たり前になっているという実態を初めて知った。

- 19 聴覚障がいの子が生まれたら、ぴよんぴよん教室や生野支援学校を案内される。支援学校を止めて、難聴学級に入らないと通学支援を受けられない。聴覚障がいはコミュニケーション障がいでもある。

計画の用語説明が必要という意見があった。

センター校しかなく、地域の学校に通えないという現状。こういう課題も踏まえて計画を立ててほしいという話をしていた。

いろいろな人がいるが、自分と同じような子がいるという安心感がセンター校にはある。福祉的なところだけではなく。

教育委員会が専門分科会や作業部会に出てこないというのは課題。

- 23 医療の考えが抜け落ちている。カニューレが外れても資格を持っている看護師さんでないと対応できない。緊急時に医師しか対応できないのは課題。できる人を増やしていけるよう福祉からも働きかけることが必要では。

人材不足の問題で他市町村に行かないといけないという話も聞く。教育だけではなく、障がいがある子と一緒に遊ぶことが大切。